

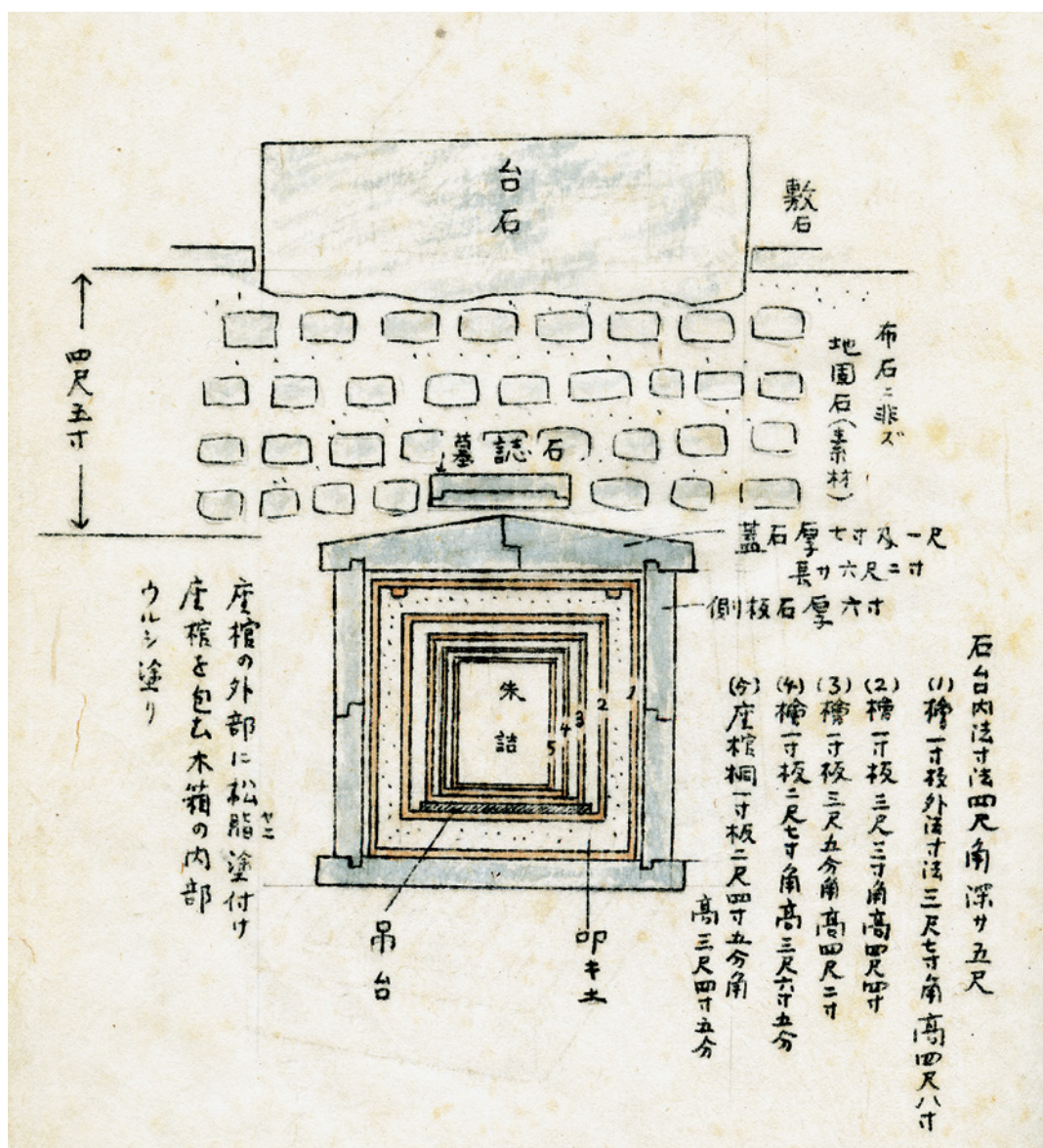


図1 二代光友墓所断面図
「棺断面見取図」(「建中寺墓地改葬日誌」所収)のうち 徳川美術館蔵



図4 葵紋付黄金造飾太刀拵 徳川美術館蔵

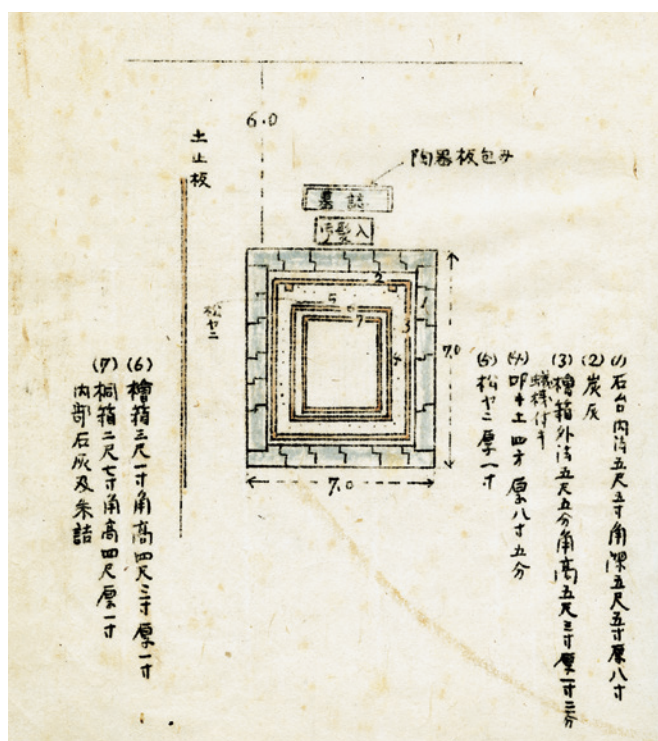


図2
八代宗勝墓所断面図
「棺断面見取図」
〔「建中寺墓地改葬日誌」所収〕のうち

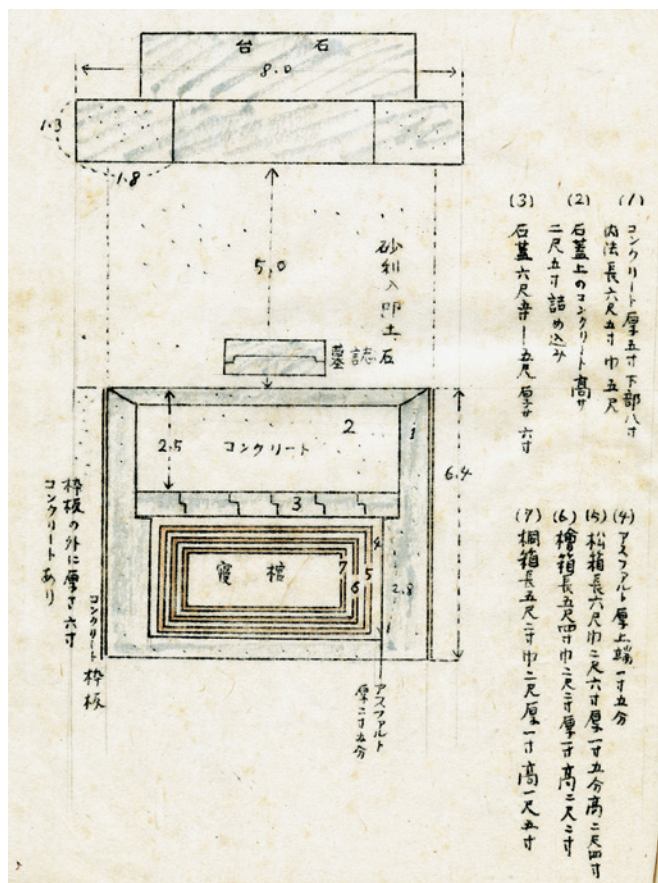


図3
十八代義礼墓所断面図
「棺断面見取図」
〔「建中寺墓地改葬日誌」所収〕のうち

〔史料紹介〕

「建中寺墓地改葬日誌」について

はじめに

一 本史料の成立背景

二 本史料の概要

三 「改葬日誌」抄録

四 尾張家墓所の特徴

おわりに

はじめに

「建中寺墓地改葬日誌」(徳川美術館蔵。以下、「本史料」と略称する)は、昭和二十七年(一九五二)から同二十八年にかけて実施された、徳興山建中寺(名古屋市中東区)に所在した尾張徳川家(以下、「尾張家」と略称する)の墓所の改葬・整理にかかわる記録である。⁽¹⁾ 建中寺は、二代光友(瑞龍院)が父である初代義直を供養するため慶安四年(一六五二)に創建した寺院で、その墓地(以下、「建中寺墓地」と略称する)には光友から幕末に至るまでの歴代当主

「建中寺墓地改葬日誌」について

安藤 香織

の墓所が営まれた。改葬の際には、尾張家の指揮のもと、祖先崇拝を重んじ、関係者のみで内密に作業を完了するよう要請されていたため、本史料はこれまでその存在と内容の一部が紹介されているものの、一般にほとんど公開されてこなかった。⁽³⁾

近世大名墓の研究は、考古学・歴史学・宗教学・人類学など幅広い視点から進められている。⁽⁴⁾ その研究成果として、武家社会における墓は、身分の階層によって規模・地上墓碑・地下構造に違いがあることが明らかになっており、序列の頂点である徳川将軍家はもとより、当然、御三家筆頭である尾張家の墓所も、大名墓研究における重要な位置を占めている。尾張家の墓所に関するこれまでの研究は、昭和十四年に発表された建中寺墓地の墓碑に関する坂重吉氏の論考の他は、昭和二十七年の改葬の後、建中寺墓地の旧敷地から昭和五十七年に三基、平成十三年(二〇〇二)に二基の墓所が再発見され、発掘調査が実施された成果から発展している。⁽⁶⁾ これら再発見された墓所には順に号数が付され、一号墓は六代継友(晃禅院)、二号墓は十四代慶勝六男の安千代(秋英院)、三号墓は五代五郎太(真巖院)、四号

墓は十一代斉温（良恭院）、五号墓は九代宗睦養子の勇丸（教令院）と推定された。改葬後に残置された地下遺構部のみではあるものの、各発掘時の報告書には調査・観察の結果が詳細に記されており、木村有作氏は石・木・漆喰などの重層構造であったことや徹底した防水・防湿対策がなされていたことなどを指摘され、三縁山増上寺・東叡山寛永寺など江戸の徳川将軍家墓所との構造的な類似性も示唆された。⁽⁷⁾一方、地上部分については、改葬前の坂氏の研究により鵜沼石の使用や構造の特徴が指摘されて以降、現存する初代義直の応夢山定光寺（愛知県瀬戸市）の墓所、建中寺に復元保存された二代光友の墓所、建中寺墓地から平和公園（名古屋市中種区）に移設された七代宗春（章善院）の墓碑、同じく小牧山史跡公園（愛知県小牧市）に移設された九代宗睦（天祥院）の墓碑から、光友以降の墓碑形式の規則化が論じられている。⁽⁸⁾また野澤則幸氏は、建中寺や平和公園などに所在する残欠片や再利用された墓碑にも検討を加えられた。⁽⁹⁾

以上のように、主に考古学の視点から尾張家の墓所の上下構造が明らかにされているが、本史料にはなお、現状の遺構からは確認し得ない発掘時の状況や、失われた出土品の詳細などが記録されており、これまでの研究を補完する内容が多く含まれている。現在の発掘報告書などと比較すれば情報の不足もあるが、この時期の大名墓発掘は一般的に私的な事業と捉えられており、本史料のように記録が残されていること自体、貴重な例と言える。尾張家の墓所の全容の把握に向けて、本史料が重要な手がかりとなることは間違いないく、徳川将軍家や他の大名家の墓所との比較材料をも提供し得ることから、関連史料と合わせて本稿にて紹介する次第である。

一 本史料の成立背景

第二次世界大戦終結直後の昭和二十年（一九四五）九月、名古屋市は「名古屋市再建に関する決議案」を市会において決議し、国の「戦災地復興計画基本方針」決定に先行して復興計画を開始した。⁽¹⁰⁾この計画は土地区画整備事業を主体としており、墓地の移転・整理も含まれていた。名古屋市と諸宗派寺院代表との交渉の結果、復興土地区画整理区域に該当する墓地は罹災・非罹災の別なく全て移転すること、移転の費用は名古屋市が負担すること、移転先の交付面積は現在の墓地の約三割増とすること、移転先として総合墓地公園を設けることなどの条件が定められた。昭和二十二年には都市計画墓地として第一号東墓苑（名古屋市中種区。現・平和公園）が告示され、移転先が決定した。こうして同年度から墓地の移転が始まり、昭和三十二年度にはほとんどの墓地が移転を終え、昭和五十四年度までに寺院数二百七十八ヶ寺、墓地面積十八万九千九百八十三平方メートル強、墓碑数十八万七千四百五基の移転を完了した。以上の経緯のなかで、尾張家の菩提寺・建中寺についても、境内地およびその北部に広がる建中寺墓地の整理・移転が企図されるに至ったのである。

公益財団法人徳川黎明会には、同会が財団史編纂のために関係機関から取り寄せた史料があり、尾張家の墓地整理の関連史料が含まれている。それによると、尾張家では既に明治時代末期から昭和初期にかけて数度にわたり、東京・名古屋の諸寺院に点在した類縁の墓所を整理し、建中寺に改葬していたとわかる。⁽¹¹⁾さらに昭和十三年から十四年にかけては、それら改葬墓を中心とする七十八霊を、初代義直の墓所が所在する定光寺に新造し

た納骨堂へ改葬している。すなわち、建中寺墓地の整理・移転が企図された時点において、尾張家としては大部分の墓地整理を實行した後であり、このとき建中寺墓地に残されていたのは、同家の根幹をなす歴代当主を中心とする墓所のみであった。そのためか、名古屋市の交渉初期にあたる昭和二十三年から二十五年頃には、建中寺および尾張家を惣代とする檀家や信徒代表は、境内地ならびに建中寺墓地を景勝地区また史跡保存地区として遺してほしい旨を名古屋市へ陳情している。⁽¹²⁾しかしながら前述のとおり、復興土地区画整理区域に該当する墓地は全て移転する方針であったため、陳情は受け入れられない旨が同二十七年六月十七日に名古屋市より通達された。これを受け、建中寺墓地に所在する二代光友以下、歴代当主やその家族たち、三十八霊が改葬されることとなった。

改葬工事は昭和二十七年十一月十日に尾張家側の現場担当者が着任し、十二月七日から発掘が実行された。遺体・遺骨は順次火葬の上、同二十八年十月二日に定光寺の納骨堂に納められた。副葬品は、出土した際に一部が埋め戻された他、発掘全体が完了した後、状態の良い品を別途保管することとし、残りは処分された。地下部分の堅牢な埋葬施設は埋め戻され、地上部分の石造物である墓碑・灯籠などについては、払い下げや譲渡がなされた。このうち先に触れたとおり、二代光友の墓所は、改葬の後、現地に復元され、建中寺に保存されている。また七代宗春の墓碑・墓誌は灯籠五十基とともに平和公園へ、九代宗睦の墓碑・墓誌は灯籠三十基とともに小牧山史跡公園へ移設された。この改葬の後、墓地区域は東海中学校・高等学校や名古屋市立あずま中学校、市営住宅などの敷地となり、一部の遺構が再発見ののち発掘調査されたのは先述のとおりである。

なお昭和二十八年には、西光庵（東京都新宿区）に埋葬されていた十四代

慶勝・十六代義宜を含む七霊も発掘がなされ、建中寺墓地の諸霊と同時に定光寺納骨堂へ安置された。⁽¹³⁾これをもって各地に散在した尾張家類縁の墓所は、定光寺（初代義直）、宝亀山相応寺（初代義直母・於亀の方、名古屋千種区）、大雄山性高院（徳川家康四男・松平忠吉、同千種区）、持名山高岳院（徳川家康八男・仙千代、同東区）、性海山梅香院（川田久保松平家初代友著母、同中区）を除き全て改葬され、諸霊が定光寺納骨堂に祀られるに至った。以上の墓所改葬にかかわる計画推進は、当時の徳川黎明会会長・二十代義知（一九二〇―一九九二）の父、十九代義親（一八八六―一九七六）が主導して行なった。

二 本史料の概要

本史料は、縦二五・〇糎、横一七・二糎の綴葉装冊子である。「建中寺墓地改葬日誌」と通称されるが、表紙外題には「建中寺墓地改葬日誌 建中寺墓誌 発掘品目録 棺断面見取図」とあり、そのとおり次の三部が合綴されている。

- ・「建中寺墓地改葬日誌」（以下、「改葬日誌」と略称する）
- ・「尾張家建中寺墓誌」（以下、「建中寺墓誌」と略称する）
- ・「発掘品目録并棺断面見取図」（便宜上、以下、「発掘品目録」「棺見取図」と分けて略称する）

表紙と扉には厚手の酸性紙、「改葬日誌」「建中寺墓誌」「発掘品目録」には薄葉紙（雁皮紙）の徳川美術館用箋、「棺見取図」には薄葉紙（雁皮紙）が用いられている。各葉裏面にはカーボン紙により転写された跡があり、二部（三部が同時に製作されたと推察され、そのうちの二部が「昭和二十七年八月建中寺御墓所改葬及定光寺納骨堂奉安に至る記録」⁽¹⁴⁾）に合綴されている。

墓碑	墓誌奥付	地下構造	発掘日	仮番号
五輪塔形(梵字「キリーク」)	元禄十二稔己卯六月 日 尾陽詞臣并河子健百拝誌	挿図2	12/14	18
弧頭板碑形	(奥付なし)	図1	12/18	1
弧頭板碑形(改葬時には半壊)	正徳三年癸巳八月十八日 儒臣安藤訥謹誌	挿図2	12/10	21
弧頭板碑形	正徳三年癸巳十一月十日 (撰者の記載なし)	挿図2	12/9	13
弧頭板碑形	享保十五年庚戌十二月十六日 儒臣安達時信謹誌	挿図2	12/9	14
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図2	12/12	22
五輪塔形(改葬時には上部欠失。梵字「キリーク」か)	(奥付なし)	挿図2	未詳	17
五輪塔形(梵字「キリーク」か)	(奥付なし)	挿図2	12/9	12
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張儒臣須賀安貞頓首謹誌	図2	12/20	38
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張儒臣須賀安貞頓首謹誌／(天保十年十一月五日追誌)明倫堂督学臣林維祺恭奉命誌	挿図3	12/11	20
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図3	12/9	16
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図3	12/10	15
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図3	12/13	19
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図2	12/12	23
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張儒臣須賀安貞頓首謹誌	挿図5	12/13	36
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張儒臣須賀安貞頓首謹識	挿図3	12/12	24
弧頭板碑形	(日付の記載なし)明倫堂督学臣岡田挺之謹撰	挿図3	12/12	25
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張儒臣須賀安貞頓首謹識	挿図5	12/22	32
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張儒臣須賀安貞謹識	挿図5	12/14	37
弧頭板碑形(改葬時には倒壊)	(日付の記載なし)明倫堂督学臣林維祺 奉 命拝撰	挿図4	12/19	26
弧頭板碑形	(日付の記載なし)尾張国校教授臣正木時宏奉命謹撰	挿図4	12/15	27
弧頭板碑形	(日付の記載なし)国校督学臣正木時宏謹撰	挿図5	12/17	31
弧頭板碑形	(日付の記載なし)明倫堂督学臣正木時宏謹誌	挿図4	12/19	28
弧頭板碑形	(日付の記載なし)明倫堂督学臣正木時宏謹誌	挿図4	12/16	29
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)御側物頭格明倫堂督学臣阿部伯孝謹撰	挿図1	12/7	11
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)明倫堂督学臣阿部伯孝謹撰	挿図1	12/7	8
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)明倫堂督学臣渡辺端之謹撰	挿図1	12/7	7
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)明倫堂督学臣渡辺端之謹撰	挿図1	12/7	6
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)御側物頭格明倫堂督学臣阿部伯孝謹撰	挿図1	12/7	5
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)側物頭班明倫堂督学兼侍講臣鷲津宣光謹撰	挿図1	12/7	4
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)側物頭班明倫堂督学兼侍講臣鷲津宣光謹撰	挿図1	12/7	3
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)側物頭班明倫堂督学兼侍講臣鷲津宣光謹撰	挿図1	12/7	2
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)名古屋藩儒官佐藤楚林謹撰	挿図1	12/7	9
弧頭板碑形(小)	(日付の記載なし)名古屋藩儒官佐藤楚林謹撰	挿図1	12/7	10
五輪塔形	(奥付なし)	挿図2	12/17	30
弧頭板碑形	(奥付なし)	図3	12/16、12/18	34
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図6	12/20、12/22	33
弧頭板碑形	(奥付なし)	挿図7	12/17	35

表1 建中寺尾張家墓所被葬者一覧

凡例

- ・建中寺尾張家墓所に埋葬された38霊を、歿年月日順に表記した。
- ・被葬者名・生年月日・歿年月日の各欄は『徳川諸家系譜』（続群書類従完成会 1974年）・『名古屋叢書三編 第一巻 尾張徳川家系譜』（名古屋市教育委員会 1988年）を参照し、『平成新修旧華族家系大成 下巻』（霞会館 1996年）にて適宜補った。
- ・生年月日・歿年月日の各欄は、『徳川諸家系譜』と『名古屋叢書三編 第一巻 尾張徳川家系譜』の記述が異なる場合、後者をく）内に併記した。また西暦を（ ）内に記した。
- ・墓碑欄には「建中寺御墓所改葬前写真」から判明する墓碑の形状を記載し、備考を（ ）内に記した。
- ・墓誌奥付欄には「尾張家建中寺墓誌」から判明する墓誌撰文の日付と撰者を記載した。
- ・地下構造欄には本稿の図・挿図の番号を記載した。
- ・発掘日欄の日付はいずれも昭和27年(1952)である。
- ・仮番号欄は昭和27年の改葬時に振られた番号を記載した。

代数	被葬者名	諡号	院号	当主との続柄	生年月日	歿年月日
3	綱誠	誠公	泰心院		承応元(1652).8.2	元禄12(1699).6.5
2	光友	正公	瑞龍院		寛永2(1625).7.29	元禄13(1700).10.16
4	吉通	立公	円覚院		元禄2(1689).9.17	正徳3(1713).7.26
5	五郎太	達公	真巖院		宝永8(1711).正.9	正徳3(1713).10.18
6	継友	曜公	晃昇院		元禄5(1692).2.8	享保15(1730).11.27
	輔君		瑞祥院	4代吉通正室	元禄3(1690).正.25	享保16(1731).5.29
	和泉		泉光院	6代継友生母	寛文8(1668).10.29	元文3(1738).8.2
	梅津		宣揚院	7代宗春生母	延宝元(1673).7.29	寛保3(1743).9.2
8	宗勝	戴公	賢隆院		宝永2(1705).6.2	宝暦11(1761).6.22
7	宗春	逞公	章善院		元禄9(1696).10.26 〈28〉	明和元(1764).10.8
	治休	孝公	紹隆院	9代宗睦男	宝暦3(1753).10.7	安永2(1773).6.14 〈18〉
	治興	昭公	天祐院	9代宗睦男	宝暦6(1756).11.25	安永5(1776).7.8 〈10〉
	好君		転陵院	9代宗睦正室	享保15(1730).4.23	安永7(1778).8.26 〈28〉
	俊姫		蓮沼院	治行女	安永9(1780).4.27	寛政4(1792) 〈寛政2〉 .8.5
	治行	白公	憲聡院	9代宗睦養子	宝暦10(1760).4.5	寛政5(1793).8.晦
	五郎太	懷公	寛柔院	治行男	天明元(1781).10.15	寛政6(1794).9.3 〈8.晦〉
	勇丸		教令院	9代宗睦養子	寛政5(1793).9.20	寛政7(1795).9.20
9	宗睦	明公	天祥院		享保17(1732).9.20	寛政11(1799).12.20
	従姫		聖聡院	治行正室	宝暦7(1757).10.13	文化元(1804).7.27
11	斉温	僖公	良恭院		文政2(1819).5.29	天保10(1839).3.20
	福君		俊恭院	11代斉温継室	文政3(1820).10.19	天保11(1840).9.29
12	斉莊	懿公	大覚院		文化7(1810).6.13	弘化2(1845).7.6
13	慶臧	欽公	顕曜院		天保7(1836).6.15	嘉永2(1849).4.7
10	斉朝	順公	天慈院		寛政5(1793).8.23	嘉永3(1850).3.晦
	栄姫		蕙心院	14代慶勝女	嘉永5(1852).閏7.22	嘉永6(1853).5.26
	寛之助		霊珠院	14代慶勝男	安政元(1854).8.15	安政3(1856).正.4
	常千代		理性院	15代茂徳男	文久2(1862).3.22	文久3(1863).5.14
	時千代		賢明院	14代慶勝男	文久2(1862).12.3	文久3(1863).5.24
	岑姫		春陽院	14代慶勝女	文久2(1862).10.24	元治元(1864).3.9
	鈺千代		善明院	14代慶勝男	慶応2(1866).9.29	慶応3(1867).4.24
	知千代		快樂院	14代慶勝男	慶応2(1866).2.21	慶応3(1867).6.9
	(命名なし)		秋露院	14代慶勝男	慶応3(1867).7.10	慶応3(1867).7.13
	盛千代		霊沼院	14代慶勝男	慶応4(1868).正.12	明治2(1869).3.晦
	安千代		秋英院	14代慶勝男	元治元(1864).11.10	明治2(1869).8.5
	猶姫		貞慎院	12代斉莊正室	文化4(1807).12.21	明治5(1872).2.22
18	義礼	恭公	法城院		文久3(1863).9.19	明治41(1908).5.17
	登代		真相院	18代義礼夫人	安政4(1857).閏5.5	明治41(1908).8.19
	良子		真光院	18代義礼夫人	明治2(1869).3.7	大正13(1924).11.13

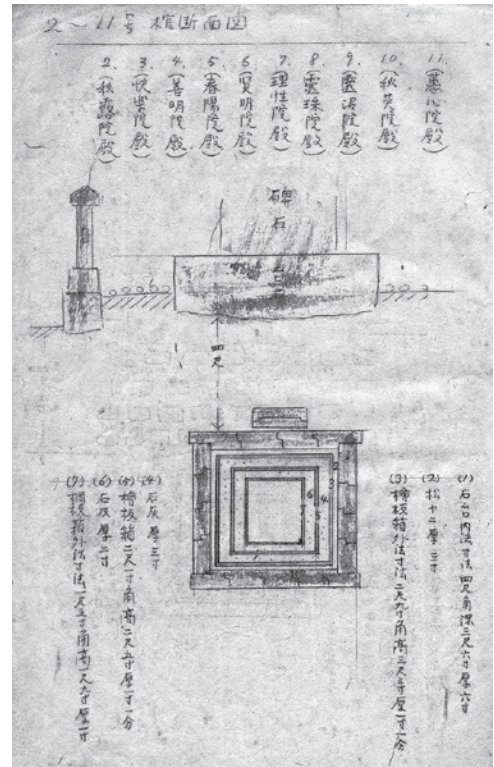


插图1 秋露院殿ほか棺断面見取図

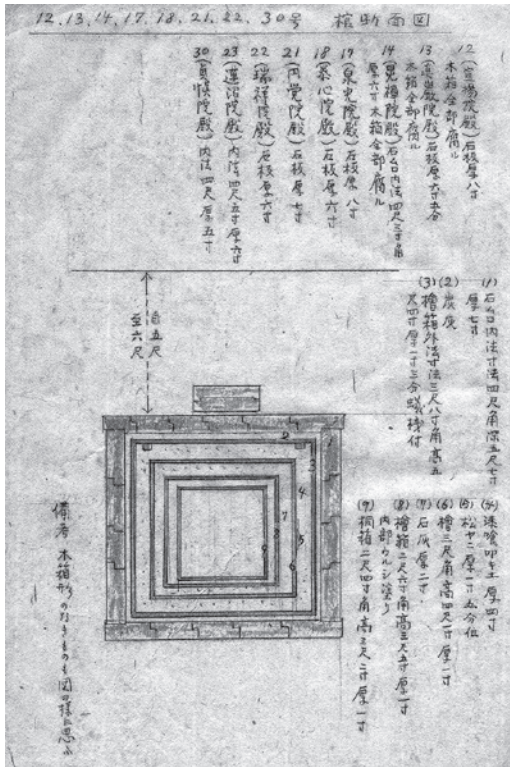


插图2 宣陽院殿ほか棺断面見取図

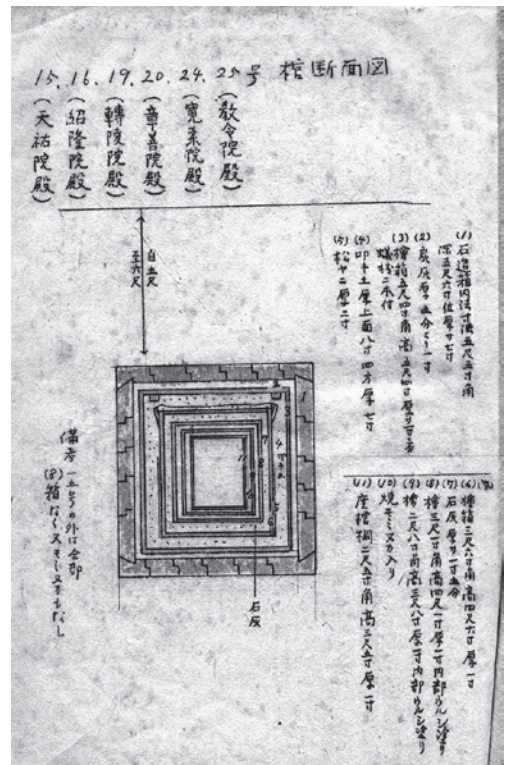


插图3 天祐院殿ほか棺断面見取図

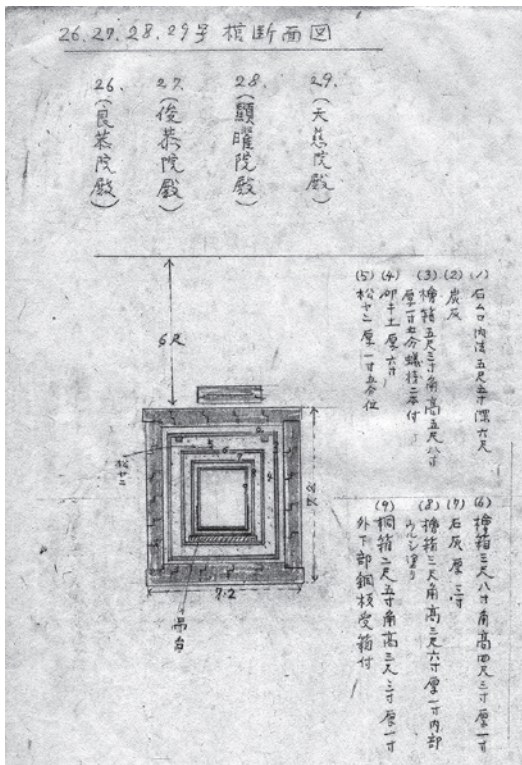


插图4 良恭院殿ほか棺断面見取図

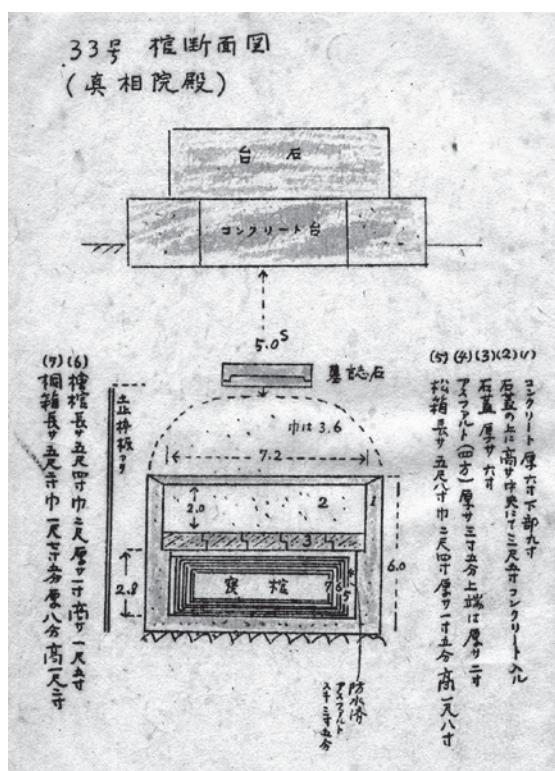
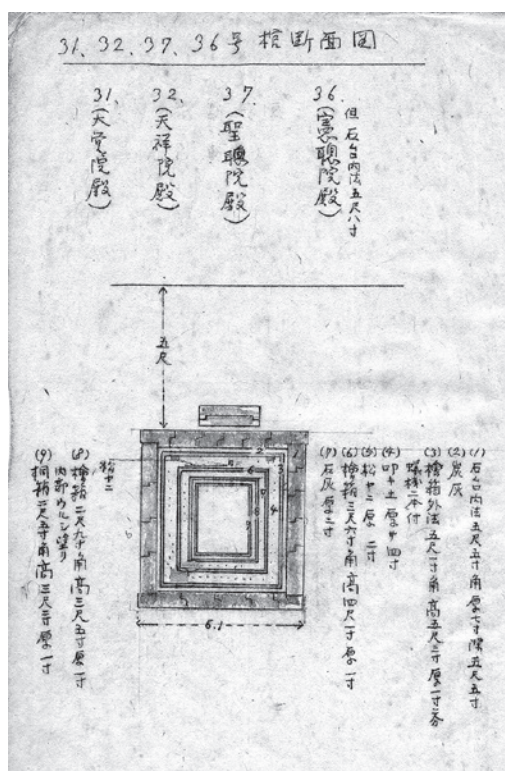


插图6 真相院殿棺断面见取图



挿図5 大覚院殿ほか棺断面見取図

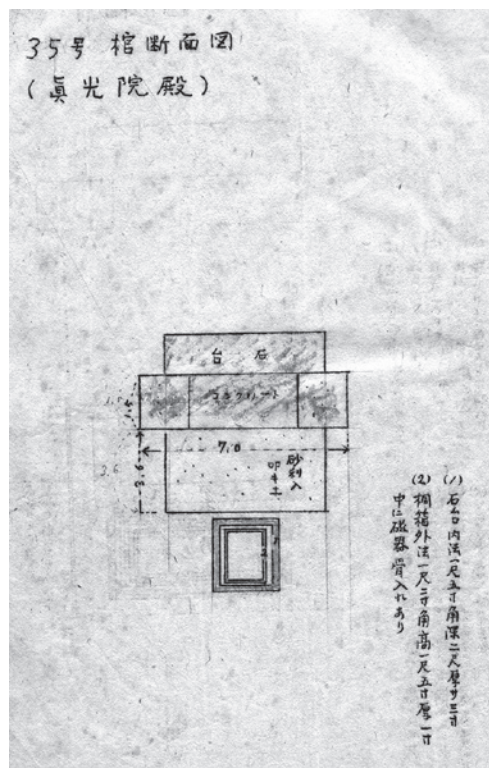


插图7 真光院殿棺断面見取図

「改葬日誌」は、尾張家側の改葬担当者であつた徳川美術館職員・大橋正次の視点で書かれているようで、後にまとめて清書されたのが本史料だと考えられる⁽¹⁶⁾。序に改葬の概要と雑感が記された後、昭和二十七年（一九五二）十月九日から翌年二月十四日まで、日付を追つて工事の進捗が記録されている。名古屋市と尾張家側との交渉の経緯や、土地・石造物などの譲渡先である東海学園・小牧市などとの交渉の様子、各作業の責任者・担当者、経費などから、発掘時の状況、遺構の構造などまで知ることができる。ただし、改葬を発掘の目的とするため、墓所の構造よりは棺内の遺体の状態や着衣・副葬品に主眼が置かれて記録されている。史料の量が多いため、今回は発掘時の状況や遺構の構造にかかわる部分を抜き出し、次章にて翻刻した。「建中寺尾張家墓所被葬者一覧」（表1）に改葬された諸霊をまとめるとともに、発掘日を記したので適宜参照されたい。

「建中寺墓誌」には、この時発掘された二代光友から十三代慶臧（顕曜院）、および十八代義礼の歴代当主計十三霊と、四代吉通正室・輔君（瑞祥院）をはじめとする歴代当主の正室・継室・夫人六霊、世子・世孫・当主生母・その他子女計十九霊、合計三十八霊の墓所全てから出土した墓誌が翻刻されている。表1に墓誌撰者を記載した。

「発掘品目録」は出土した副葬品の目録で、遺構ごとに品名・員数が列記されている。このうち一部は昭和二十八年に東京へ移動したこと、また約半数は昭和三十一年十一月十日に、十九代義親の命により焼却・破棄されたことなども追記されている。「建中寺尾張家墓所副葬品一覧」（表2）にまとめた。

「棺見取図」には棺・墓誌の構造を示す図とともに、地下構造の別により十種の「棺断面図」が、線描と薄茶色・青鼠色の二色の淡彩によつて描

かれる。最後に「墓誌埋の位置」として一図が添えられる。「棺断面図」には、棺槨類や充填材の材質・法量など「改葬日誌」に含まれない内容も記録されているため、十種全ての図を掲載した（図1～3、挿図1～7）。また、表1に本稿における図・挿図番号を付した。

以上の後に、「徳川家墓地移転工事工程表」、青焼の「徳川家墓碑配置図」（挿図8）、「従業員心得」が折込まれ綴じられている。

三 「改葬日誌」抄録

以下に「改葬日誌」より、発掘が実施された昭和二十七年（一九五二）十二月七日から二十二日までの記述のうち、地下構造・墓碑・副葬品・遺体・遺骨など、発掘状況に関わる部分を抜き出して記載する。なお旧字・略字は適宜常用漢字に改めた。必要に応じて句読点を加えた。院号には初出のみ（ ）内に諱・幼名などの俗名を表記した。

（昭和二十七年十二月七日条）

十二月七日 日、晴

天気快晴にて次の十霊の発掘をなす。

（命名なし）（知千代）（岑姫）（時千代）
秋露院、快樂院、善明院、春陽院、賢明院
（常千代）（寛之助）（盛千代）（安千代）（榮姫）
理性院、靈珠院、靈沼院、秋英院、蕙心院

発掘に際し、菱田微立師、伴僧二名を伴ひ各霊毎に読経を行ひ、右経終つて発掘にとりかゝれり。先づ靈域周囲六尺平方程を地下四、五尺程度に掘下げると、中央に一尺五寸平方、高さ一尺の石あり。この石は平面に両分され、上石に御霊名を刻し、下石に墓誌が刻しあり。

墓誌は文章漢文を以て大体同一形式なり。一例を示せば

秋露公子

前尾張国主大納言慶勝卿之第九男也

母秋月氏慶応三年丁卯七月十日生於

新殿末名十有三日殤越九日葬於

愛知郡古井村建中寺法号為秋露院

殿如幻即空大童子

とあり、この終りに撰者が刻しあり。次の四氏の氏名の中、墓誌に依りそれ〴〵一名なり。

側物頭班明倫堂督学兼侍講臣

鷺津宣之^(ツマモ)

名古屋藩儒官

佐藤楚林

明倫堂督学臣

阿倍伯孝

明倫堂督学臣

渡辺端之

上石は各靈位の院名を刻しあり。一例を示せば、

前尾張国主大納言慶勝卿第九男秋露公子之墓

若しくは簡単に

靈沼院君之墓

とあり。この墓誌石の下は厚さ凡そ五寸、幅一尺二寸、長さ四尺六寸程の荒目石が併列しあり、その数四本にて石の蓋をなす。其の下同様の石材を以て石室をなしあり。この併列の石を取り除くと、檜材厚さ五分を以て作れる二尺八寸立方の外箱あり。その周囲を樹脂を以て厚さ一寸余程塗りかためあり。この内に同様の材料を以て作られた中箱ありて、無数の念仏を書したる和紙にて燈芯若しくは御香を包みなどしたり、若しくは櫛^{しきみ}の葉を入れたり、石灰を満たして空間を塞ぎ

あり。この中箱の中に桐材(厚さ五分)を以て作れる御棺あり、一尺五寸平方、高さ約二尺なり。

此等の靈は御子様なる故に稍少なり。上部は干藁を列べ置きたる如く多量の燈心を以て覆ひ、念仏を書したる包紙多数と、少量の玩具、大小の木刀あり。御遺骸は白麻帷子を着され、大きな風呂敷様の白布にて包まれ、何れも屈葬式の正座の姿体なり。念仏書の中には御通夜のお伽に参加したと推される人名を散見す。玩具は張り子、陶器、木製槌形ガラ〴〵の如きものあり。

御歳六才にて逝去されたる秋英院殿は、麻上下に葵紋の袴が別に入れあり、藁草履もありたり。

各靈何れも乾固のミイラ状態にありき。賢明院、靈珠院の両墓所は多量の浸水ありたるが、靈沼院の如きは御棺の中真黒く、煤煙が棺の内部に積り、宛も焼却したるが如き状を呈しありしは不思議なり。(後略)

(昭和二十七年十二月九日条)

十二月九日 火、雨

この日小雨なりしが、七日同様に菱田師外二名の読経に始まりて、^(梅津)宣揚院殿、^(五郎太)真巖院殿、^(継友)晃禪院殿、^(治休)紹隆院殿の発掘を敢行す。墓域は六尺平方位の周囲を四、五尺にして石蓋に達するが、宣揚院、真巖院、晃禪院の墓誌は豎置にして、赤銅厚さ三分、幅一寸位を以て二ヶ所を束しあり、文字には朱を入れあり。(泉光院の如く鼓形の鉛にて止めあるものもあり)。紹隆院の墓誌は大なるため平置しありて、赤銅線を以て十文字に束しあり。

石蓋は大体四尺平方あり、深さ一尺六寸下りて、一尺一寸幅の中階あり、この下に棺は二尺平方位にて二尺二寸位の深さありて、墓穴は階段状をなす。

石蓋を取り除くと粉炭（或は香なりと云ふ者もあり）を撒布し、その下に石灰、赤土砂を水を用ひずカラ混ぜしたるタ、キ土厚さ一尺程を置きて、その下に木箱あるも、多く腐朽して落下し居れり。落下せる棺中には石灰に朱の混じた粘土状をなす物多量あり、棺の外側にありしものか内部にありしものか判然せざるも、湿気を考慮されたるものと考へられる。

棺側に当る一番の外側は石材を積み石室式をなすも、単に石を積みたるまゝなるに依り、多少の隙を生じ、草木の根が、この隙より棺内に迄延びて、宣揚院殿の如きは遺骸の頭骨に迄喰い入りて、眼底より芽を出しあり。その状言語につくし難し。

（昭和二十七年十二月十日条）

十二月十日 水、曇

（治興）
（吉通）
天祐院、円覚院の発掘をなす。

天祐院は紹隆院と同様に於て、棺二尺八寸平方、高さ三尺八寸にて、遺体も大体に於て屍蠟状態をなす。衣冠束帯の姿にて坐せらる。これに対し円覚院様は棺は殆んど腐朽し原形をとゞめず、墓穴の構築状況も極めて簡素にして、その穴も小さきは意想外なりき。石蓋も天祐院の（長さ七尺、幅一尺、厚さ七寸）七枚に対し、円覚院は二枚にて、真巖院と同一形式なり、則ち長さ五尺、幅二尺五寸の二枚蓋なり。

（昭和二十七年十二月十一日条）

十二月十一日 木、晴

（中略）

（宗春）
今日の発掘は章善院様一体也。墓誌は追贈分と共に二つあり。追贈分は後年に墓域を再発掘して埋めたるため、柵の周囲と棺の位置とが相違せり。（後略）

（昭和二十七年十二月十二日条）

十二月十二日 金、晴

（補君）
（後姫）
（五郎太（吉行男））
（勇丸）
本日、菱田師伴僧一名にて、瑞祥院、蓮沼院、寛柔院、教令院、
（綱誠）
（治行）
泰心院并に憲聡院の読経をなす。

（中略）

二十二号瑞祥院様は腐朽して原形なし。

蓮沼院、寛柔院、教令院は（中略）何れもこれ迄と相違特記すべき事なしとの報告を現場員より受く。唯、何れかに棺の下部に赤銅の落しはめありしものあり。（後略）

（昭和二十七年十二月十三日条）

十二月十三日 土、晴

（好君）
この日、十九号転陵院の発掘をなしたるが、棺の三分の二以上地下水に充ちて遺体浮べるの状態なり。然るに午後の発掘になる三十六号憲聡院は天祐院以上に完全に近い屍蠟状態にて、頸部の皮膚等水死者の如く完全にブヨブヨ状をなす。頭髮、髻の状態もそのまゝにて、耳穴、鼻穴等に朱を以て詰めあり。（後略）

(昭和二十七年十二月十四日条)

十二月十四日 日、晴

本日、墓前読経を菱田師伴僧二名にて左記各霊に行ひ、大橋、柴本参列。

(齊温) (從姫) (慶藏) (齊朝) (福君) (宗勝)
良恭院、聖聡院、顕曜院、天慈院、俊恭院、賢隆院

発掘は聖聡院殿、泰心院殿の二霊也。

前者は腐朽と浸水甚しく、わづかに御遺骨を発掘し得たるに過ぎず、後者も類似の情況なりしが、遺品刀剣類外四、五点、印籠等を発掘せり。

後者は二枚石蓋にて、その下石室の外は厚さ六寸、深さ四尺の赤土状の当時のコンクリート式土固めありて、棺に用いたる板材等は殆んど見当らず。墓地埋葬用の土は灰色のザクザクした粘質なき砂土状にて、従来 of 土と出所を異にす。(後略)

(昭和二十七年十二月十五日条)

十二月十五日 月、晴

俊恭院様の発掘を行ひしが、浸水部分多量にて工事に難渋す。終日工事を続行し、三時でやつと堀上ぐ。頭蓋骨、齒列等極めて完全なり。

(後略)

(昭和二十七年十二月十六日条)

十二月十六日 火、雨

天慈院様の発掘を行ひしが、前夜来の雨にて一層に墓穴に浸水多く、水の汲み出しに手間取り、本日もこの一霊のみ。墓穴中に多数の

「建中寺墓地改葬日誌」について

小石に念仏を墨書せるもの出でしがこの墓の特色なり。

石蓋に用ひし各石の合せ目に、麻縄屑を練り合せて、隙間塞ぎを施せるを見たるは、この霊の構築に於て初めて見たり。

(中略)

(義礼)
法城院様墓域は八尺平方、厚さ一尺二寸コンクリート枠を取り、四尺ほどにて墓誌あり。その下コンクリート厚さのみ一尺九寸にて、石

工まづ匙を投げ、東邦瓦斯会社より、コンプレッサー自動車を借り受け、鑿石機を以て深さ三尺に及ぶも、尚、棺に達せずして、工事担当者 of 焦慮甚しく、(後略)

(昭和二十七年十二月十七日条)

十二月十七日 水、晴

天気晴れて、義親様終日検分さる。

(良子)
真光院様の御骨上げを先づ行ふ。既に大正十二年御逝去当時、御火

葬申上げあり。そのま、御内仏に安置す。コンクリートにて嚴重な構築なりしが、浸水甚しく、湧水が石室に溜り御骨壺の御骨も水の中に浮ぶ情況なり。

(猶姫)
貞慎院様の墓誌は、地上より二、三寸にしてその表面に達する位置にあり(隣接の墓地と近接の為と思はる)、今迄の例になき浅き墓穴なりしが、完全に近くミイラ化しありき。

(齊莊)
太覚院様も同様ミイラ状態で、他は諸霊と同様なりしが、榊の葉に念仏を書して無数に棺中に入れありしは初めてなり。

(昭和二十七年十二月十八日条)

十二月十八日 木、晴

（マ、光友）

瑞龍様墓域発掘につき、各報導関係、各新聞社、NHK等来場、工事々務所にて義親様記者会見を行はる。市側よりも整地部長、用地課長、係長来場立合ふ。

墓石が稍々後方に傾き、周囲九尺平方位掘りひろげると、四、五尺下に堰板の腐れを見たり。墓誌は瓦を以て覆ひあり、横置きにして両端を赤銅を以て角鉢巻しあり。その下に約一尺直径の割ぐり状石が五、六重に層をなして積み重ねあり。その下に二枚の石蓋を以て覆はれ、石の下は外棺を石灰、砂塩の混入したる砂状質の物にて埋め、棺は四重になり、外側椽は銅帯にて井桁状にしめあり。

外棺は三尺五分角、四尺の高さあり、板は桎一寸の厚板なり。

中棺は二尺七寸一分角、三尺六寸五分の高さあり。

本棺は二尺四寸五分角、三尺四寸五分高さあり。

遺体は全棺十数貫に及ぶ朱詰めあり、そのため骨格を残すのみにてミイラ化せず。副葬品は太刀、刀剣等実物入りあり。別記する如く多数ありき。

午後、法城院様、棺は厚さ四尺に近く、初めて棺に達す。二重なり。や、浸水ありしも、御遺体は御生前のまゝの座棺なり。^衰木太刀、并に桐箱に御躰の尾、扇子、略譜、御髪等入れあり。（後略）

（昭和二十七年十二月十九日条）

十二月十九日 金、晴

（中略）

この日午前、良恭院、午後、顕曜院の発掘を行ひしが、何れも完全

なミイラ化してあり。顕曜院様には無数の浮世絵書籍の副葬品あり。義親様、午後これに立合はる。

（昭和二十七年十二月二十日条）

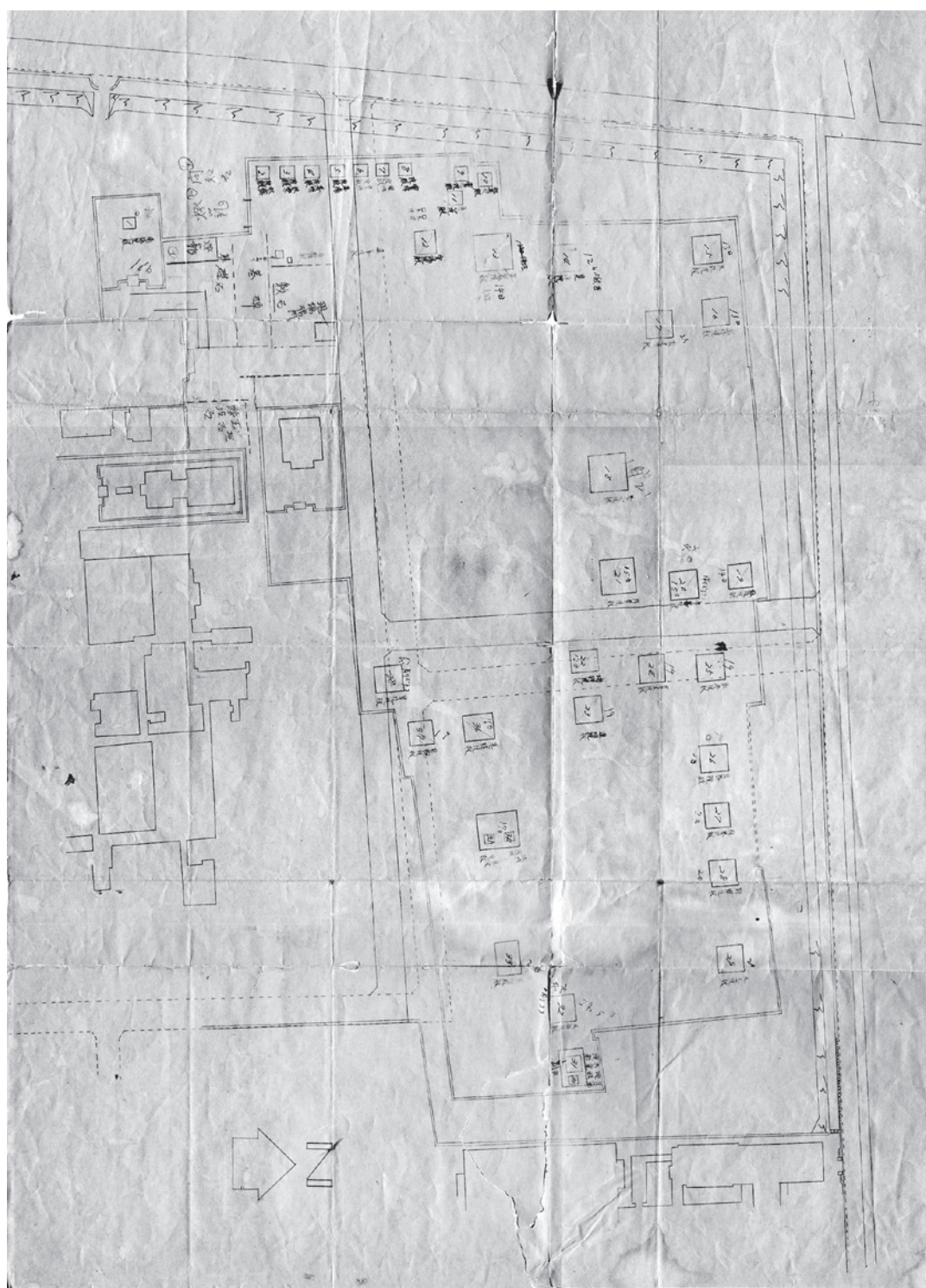
十二月二十日 土、晴

本日午前、賢隆院様の発掘を、義親様御立会の下に行ひしが、二代瑞龍院様の朱詰めの如く、御遺体は余りに多量の石灰詰めのため、むせ落ちて骨片を残すのみの状態なりき。

然し墓域の構築状況は可成りよく、墓誌は素焼瓦八寸五分平方、厚さ一寸を九枚敷きの上に置かれ、その上部も同様にして、側部は八寸五分の長方形瓦にて各三枚宛、計十二枚を以て覆ひあり、その中心の墓誌は二尺五寸平方、厚さ一尺二寸あり。この墓誌の下に更に長さ一尺五寸五分、幅厚さ上蓋二寸八分、下蓋二寸八分、この箱の中に桐二重箱入幅六寸、厚さ二寸五分にて御前髪を納めあり。

墓域は四、五尺掘下げると十尺平方程度に堰板あり。工事の際の土止めと認めらる。墓穴は六尺七寸平方あり。納棺の高さ四尺、であった石蓋は、五枚斜め合せの巨石にて、八才五分（約百七、八十貫）の御影石様の石材なり。

（登代）真相院様墓域は地上より六尺掘下げて長さ七尺、幅二尺六寸（法城院様は幅二尺六寸、幅五尺余）のコンクリート仕上げの墓室にコンクリートを覆ひたる状態にて、このコンクリートを除きて初めて本棺に達する予定なり。コンクリート一尺六寸掘下げて、アスハルトにて塗り固めあり。



挿図8 徳川家墓碑配置図(部分。紙面の都合上、図を回転して掲載している。)

（昭和二十七年十二月二十二日条）

十二月二十二日 月、曇

天祥院様の発掘を午前行ふ。構築の模様は変らぬが、腐朽もなく完全に近く、棺の引上げ困難のため、御遺体がミイラ化したため、棺を破りて御遺体を吊り上げ申して、新棺に御移し申上ぐ。御老体にて小柄の体格に拝したり。副葬品は衣冠束帯類にて、小牧山に墓碑建立につき、町当局にて硝子ケースに保存記念の由につき、之を小牧町に寄贈の事となす。

午後、真相院様の御遺体を新棺に御移し申上げ、（中略）

因みに真相院様は白装束、切髪姿に拝し、副葬品は小箱入の御産髪類に白の御召物一揃なりしが、水浸りのため、そのまま埋葬す。（後略）

四 尾張家墓所の特徴

「改葬日誌」から判明する墓所改葬の工程は、昭和二十七年（一九五二）十月十六日の撥遣法要にて三十八霊を建中寺本殿御霊屋・御内仏の両所に迎え鎮めた上で、墓碑・灯籠など地上部分の石造物の取り壊しと搬出を進め、十二月七日に墓所発掘を開始している。利便のため、墓所には二代光友を1とする仮番号が振られた（表1）。「改葬日誌」と「徳川家墓碑配置図」（挿図8）を突き合わせるに、発掘の順序としては、比較的小規模で墓地西部に連立していた、十四代慶勝・十五代茂徳の子女の墓所から開始し、その後は歴代当主とその正室・生母・子女を西部から東部にかけて順に行っている。その後、工事終盤には十九代義親の立ち合いのもと、この時最も重視されていた二代光友や、規模の大きい歴代当主墓所が発掘されている。墓

所から引き上げられた遺体・遺骨は、発掘当日から数日の後に八事火葬場にて順次火葬の上、建中寺御内仏殿に仮安置された。発掘が完了したのは十二月二十二日、火葬が完了したのは翌日であった。

発掘の手順としては、地上部分の整地がなされたのち、一・八米四方形度の方形に、地下一・二～一・八米ほど掘り下げたところで石製墓誌および石槨上面（石蓋）に至るとある。それらを取り除くと、墓所により規模の大小はあるが、数重の木槨と木棺が収められている。¹⁷「改葬日誌」には一部の墓所について、遺体・遺骨のみをやむなく取り上げた様子が記されるが、「棺見取図」と昭和五十七年および平成十三年（二〇〇二）の出土事例とを突き合わせるに、後者では各墓所で最も内側の木棺が確認されていないことから、おそらくは木棺ごと引き上げるのを基本とし、そのまま遺構は埋め戻されたと考えられる。¹⁹「棺見取図」に所収される十四代慶勝九男・秋露院（命名なし）の棺を描いた図（挿図9）も、引き上げられた木棺を開いたところから引き上げられた遺体・遺骨は、発掘当日から数日の後に八事火葬場にて順次火葬の上、建中寺御内仏殿に仮安置された。発掘が完了したのは十二月二十二日、火葬が完了したのは翌日であった。



挿図9 秋露院殿棺図

ろと考えられる。

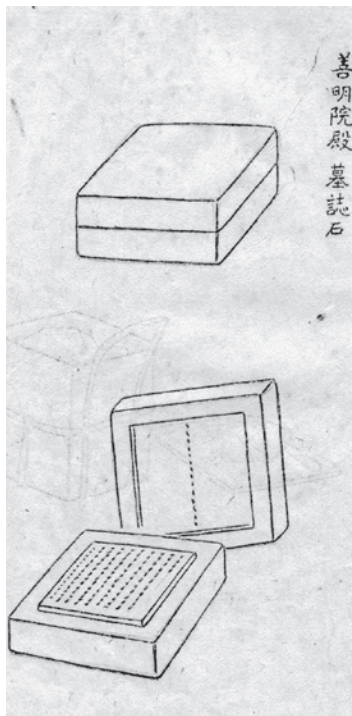
ところで、この発掘は諸霊の改葬を主眼とすることから、棺槨の蓋を開け、次の層へ進むように、階段状に掘り進めて行われたとみえる。昭和五十七年および平成十三年の発掘の際に五基全てから発見された石槨外の木槨(外木槨)⁽²⁰⁾については、発掘区画を広く設定した二代光友(二・七米四方)、八代宗勝(賢隆院、三・〇米四方)、十八代義礼(二・四米四方)に記録されるのみである。これについては、十九代義親が立ち会ったことに関係すると推測される。義親は既に数度の改葬を経験しており、この発掘においても主導的な立場にあった。義親は全工程中、この三霊の墓所発掘を含む十二月十七日から二十日の間、作業に立ち会っており、この期間中の発掘は特に慎重かつ規模を拡張して行っていた可能性がある。

尾張家墓所の特徴に的を絞ってみていくと、まず埋葬方法は、明治時代以降に亡くなった十八代義礼とその夫人・登代(真相院)が臥形、同じく義礼夫人・良子(真光院)が火葬であるのを除き、皆統一して土葬・坐形で、一部は正座であったとわかる。棺の内には遺骨のみ遺る場合もあったが、遺体の半数ほどはミイラ化するか、湧水のある墓所も多かったため屍蠟化していた。また、二代光友の木棺には朱が詰められ、八代宗勝の木棺にも朱と石灰が詰められていた。ほかに九代宗睦の養子・治行(憲聡院)の耳鼻に朱が詰められていた例があり、「改葬日誌」十二月九日条にも棺中に石灰・朱を確認したという記録がある。朱の納入については、増上寺・寛永寺に所在する徳川將軍家墓所のうち、歴代將軍をはじめ正室・生母などにみられる限定的な特徴であり、尾張家の家格を如実に示している。⁽²¹⁾

副葬品などの出土遺物は「発掘品目録」に掲載される品のほか、「改葬日誌」中に、念仏を書した包紙・小石・櫛の葉、灯心や香、装束類、裂

類、へその緒や前髪などが記録される。このうち十代斉朝(天慈院墓所から出土した念仏を書した小石は礫石経と呼ばれ、徳川將軍家墓所のうち歴代將軍のみにみられる特徴である。⁽²²⁾十二代斉莊(天寛院)墓所から出土した念仏を書した櫛も、徳川將軍家墓所に出土例があり、いずれも関連性については今後の詳細な検討が必要であろう。なお、副葬品の一部は個人蔵まった徳川美術館蔵品となつて現存しており、十三代慶藏の副葬品であつた大量の浮世絵(徳川美術館蔵)はその代表格として展覧会などでも度々紹介されてきた。また、二代光友の副葬品であつた「鞆破片」「鞆金物」「鐔」「セツパ」などは、昭和四十三年に鞆・紐・柄などを新しく補われ、「葵紋付黄金造飾太刀拵」(徳川美術館蔵、図4)として復元されている。

墓誌は、「建中寺墓誌」によれば全墓所から出土した。徳川將軍家の関係墓所では石槨蓋板に彫られる例が多いようだが、尾張家の場合には石槨とは別で、「棺見取図」に所収される墓誌石図(挿図10)のように、概して、二枚の重なり合う方形石材の内面に墓誌を刻む構造であり、赤銅線・赤銅帯によって束ねる場合もあった。撰者はいずれも尾張藩の儒学者であり、歴代大学頭・林家が撰文した徳川將軍家に倣つたものかと考えられる。こ



挿図10 善明院殿墓誌石図

これらの墓誌は、二代光友の墓誌（建中寺蔵）を除き、建中寺に保存される二代光友墓所の脇に建設された墓誌記念碑の基壇として、重ねて埋め戻されている。

この発掘に際しては、本史料のほかに、写真や拓本にて記録が図られた。このうち写真は、外題に「建中寺御墓所改葬前写真」とある写真貼り込み帳（個人蔵）一冊が現存する。墓地内部の景観を撮影したパノラマ写真とともに、各墓所の写真が貼り込まれている。墓碑の形態や周囲の状況など他にはない情報を含んでおり、本史料とともに、尾張家の墓所を復元的に考察するためには無くてはならない史料である。表1に墓碑の形態をまとめたが、特筆すべきは二代光友以下、ほぼ全ての墓碑が頂部を半月状とする弧頭板碑形であるのに対し、二代光友より早くに歿し、当主として建中寺墓地に初めて埋葬された三代綱誠（泰心院）が五輪塔形であったことである（挿図11）。球形部正面には、阿弥陀如来を表す種子「キリク」が刻まれて



挿図11 泰心院殿墓碑写真「建中寺御墓地改葬前写真」所収 個人蔵

いる。三代綱誠は、墓誌撰者もまた他とやや異なる特徴を示す。奥付に記された「詞臣」并河子健は綱誠に仕えた儒者であるが、後世の墓誌撰者が「儒臣」や尾張藩校である明倫堂の校長にあたる「明倫堂督学」と記していることからすると、少なくとも肩書が異なる。²⁴ 墓碑・墓誌とも、墓制が統一されていく前の、初発的な例と捉えることもできるだろう。

おわりに

本稿では、建中寺墓地に所在した三十八基の尾張家の墓所について、他の史料や現状の遺構からは知り得ない内容を含む本史料を取り上げ、昭和二十七年の発掘時の状況や墓所の構造、出土品にかかわる部分など、特に近世大名墓の研究に有力と考えられる事柄を中心に紹介した。また、この前提として周辺史料から判明する明治時代以来の尾張家の墓所整理の過程を報告した。

本史料や周辺史料から判明する尾張家の墓所の特徴としては、これまで指摘されていた地下の重層構造や漆喰などを用いた防水・防湿対策に加え、朱の封入や、念仏を書いた櫛の葉などの副葬品、墓誌撰者が儒者であることなどに言及し、それぞれ徳川將軍家の関係墓所との共通点が見出されることを述べた。また墓碑については三代綱誠が五輪塔型であったことを紹介し、二代光友の墓碑以降、弧頭板碑形が統一的に用いられていく以前の事例とも考えられることを指摘した。徳川將軍家はもとより、各地の大名家の墓所も含む詳細な検討が俟たれる。先学の諸研究に敬意を表しつつ、本稿が尾張家の墓所の研究を補完する一助になるとともに、多角的に進められている近世大名墓研究の更なる発展に資することを期待したい。

表2 建中寺尾張家墓所副葬品一覧

- 凡例 ・「建中寺墓地発掘品目録」(「建中寺墓地改葬日誌」所収)をもとに作成した。
- ・仮番号欄は昭和27年(1952)の改葬時に振られた番号を記載した。
 - ・被葬者名欄は表1に倣って表記し、()内に尾張家当主の代数および院号を記載した。
 - ・昭和31年焼却・破棄欄は、原本に倣い、焼却・破却された品に「▲」を付した。
 - ・出土品名称欄・員数欄・その他の記述欄には、「建中寺墓地発掘品目録」の記載内容を可能な限りそのまま記載した。
 - ・その他の記述欄の加筆部分は〈 〉内に記載した。

仮 番 号	被葬者名	出土品名称	員数	昭和31年 焼却・破棄	その他の記述	備考
1	光友(2代、瑞龍院)	香木	一			
		刀身	二		黄金造太刀一本含。〈昭和28年7月21日桜井東京持参、同29年11月12日大橋持帰、同日委託〉	
		包丁形刀身	一		〈昭和28年7月21日桜井東京持参、同29年11月12日大橋持帰、同日委託〉	
		鉾形刀身	一		〈昭和28年7月21日桜井東京持参、同29年11月12日大橋持帰、同日委託〉	
		香炉破	一	▲		
		香炉蓋破片	一	▲		
		小柄	二	▲	一本身だけ。	
		櫛	二	▲		
		鐔	二	▲		
		火箸頭	一対	▲		
		セツパ	四	▲		
		ハバキ	一	▲		
		香箱	二	▲	四角と丸、香詰。	
		鏡	一	▲		
		楕円形容器	一	▲		
		ついし香合		▲		
		弥陀木像(極小)	一		昭和28年1月22日前会長持帰。	
		鞘破片	多		昭和28年1月22日前会長持帰。黄金作太刀。	
		鞘金物	五		昭和28年1月22日前会長持帰。黄金作太刀。	
		鐔	一		昭和28年1月22日前会長持帰。黄金作太刀。	
27	福君(俊恭院)	櫛	八	▲		
		木刀	一	▲		
		鏡	一	▲		
33	宗睦(9代、天祥院)	木刀	四	▲		
		珠数	二	▲		
		キセル	二	▲		
		火箸頭	一対	▲		
		石帯	一	▲		
18	綱誠(3代、泰心院)	太刀身(鐔付)	一	▲		
		刀身(鐔付)	二	▲		
		印篋(黒塗)	一	▲		
		鏡(四角)	一	▲		
		破片		▲		
17	和泉(泉光院)	金塗棒ノ如き破片	三	▲		
19	好君(転陵院)	人形(木)大小	二	▲		
		袋	一	▲		
		鉄破片		▲		

		キセル	一	▲		
		檜扇	一	▲		
36	治行(憲聰院)	冠	一	▲		
		笏	一	▲		
		木刀	一	▲		
20	宗春(7代、章善院)	香炉	一			
		印鑑	一	▲		
		キセル	一	▲		
		火箸	一対	▲		
		耳かき	一	▲		
		匙	一	▲		
		小刀の柄と鞘	一	▲		
		錐の柄と鞘	一	▲		
		袋物	六	▲		
		平緒	一	▲		
		布の裂	一	▲		
		木太刀	一	▲		
		石帯破	一	▲		
		檜扇	一	▲		
		其他破片		▲		
21	吉通(4代、円覚院)	太刀身(鐔、脚付)	一	▲		
		刀身(鐔付)	一	▲		
		小硯箱	一	▲		
		塗箱	一	▲		
		塗小円形箱	一	▲		
		文鎮	二	▲		
		匙	一	▲		
23	俊姫(蓮沼院)	楽器(竹製)	一	▲		
		塗箱に玩具	一	▲		
		猪口	三	▲		
		小箱破片	一	▲		
		墨	二	▲		
		鼈甲頭飾	二	▲		
		紙入	三	▲		
		裂	一	▲		
		琴曲雅譜(本)	二	▲		
		折本	一	▲		
		人形	一	▲		
		筆	四	▲		
		琴爪		▲		
		扇	二	▲		
		紙はさみ	一	▲		
		玩具(羽子板、羽根)		▲		
		箱破片		▲		
24	五郎太(寛柔院)	木刀	二	▲		
15	治興(天祐院)	軸(南無阿弥陀仏)	一	▲		
		平緒	一	▲		
		刀緒	一	▲		
		檜扇	一	▲		
		木刀	一	▲		
		箱	一	▲		
		珠数	一	▲		
		箱破片		▲		
		笏	一	▲		
		石帯	一	▲		
16	治休(紹隆院)	沓	一足	▲		
		檜扇	一	▲		
		石帯	一	▲		

22	輔君(瑞祥院)	笏	一	▲		
		キセル頭	二	▲		
		箱破片		▲		
		鉄破片		▲		
13	五郎太(5代、真巖院)	刀身(鐔付)大小	二	▲		
3	知千代(快樂院)	木刀	二	▲		
		つば	一	▲		
		瓢箪	一	▲		
		猪口	一	▲		
		磁器大黒	一	▲		
12	梅津(宣揚院)	小刀の柄と鞘		▲		
		金物(手)	二	▲		
8	寛之助(霊珠院)	瓢箪	一	▲		
		陶器人形	一	▲		
		ネブリコ	一	▲		
2	(命名なし、秋露院)	木刀	二	▲		
		珠数	一	▲		
25	勇丸(教令院)	木刀	二	▲		
4	鈺千代(善明院)	木刀	二	▲		
		馬	一	▲		
		槌	一	▲		
10	安千代(秋英院)	櫛	五	▲		
		火箸		▲	半対、一本。	
		箆破損	二	▲		
		陶器の橋	一	▲		
14	継友(6代、見禪院)	太刀身(鐔、脚付)	一			
9	盛千代(霊沼院)	槌	一	▲		
		磁器製犬	一	▲		
11	栄姫(蕙心院)	瓢箪	二	▲		
		槌	二	▲		
		ネブリコ	二	▲		
		布製ネブリコ	八	▲		
		袋物	一	▲		
28	慶臈(顯曜院)	絵具箱(三重)		▲		
		硯 大小	二	▲		
		筆 十二三其他		▲		
		絵具入猪口	十五	▲		
		石帯	一	▲		
		帯	一	▲		
		扇	一	▲		
		檜扇	一	▲		
		紙入	二十一	▲	〈三ツ残ス〉	
		キセル	一	▲		
		揚子入	一	▲		「揚」は「楊」か。
		釣道具	一袋	▲		
		紙幟	二	▲		
		木槌	一	▲		
		版木	一	▲		
		絹絵カルタ	十枚	▲		
		雪月花名所合	一組	▲		
		花合	四組	▲		
		(巻物・本) 神田明神絵図	二巻		〈本ノ部ニ仮入〉	
		山王附祭絵図	三巻		〈本ノ部ニ仮入〉	

	義経勲功図会	二冊		〈本ハ本ノ部ニ入〉	その他の記述欄の末尾に「以下同様」を示す矢印あり。
	絵本大將揃	二冊			
	絵本隅田川兩岸一覽	三冊			
	浅草寺観世音御伝記	一冊			
	萬職図考	一冊			
	嘉永武鑑	四冊			
	絵本大和錦	三冊			
	永暦雜書天文大成綱目	二冊			
	早引紋帳大全	一冊			
	絵手本	二冊			
	都会節用百家通	五冊			
	北京漫画	十二冊			
	絵本錦の囊	一冊			
	象戯懷宗	一冊			
	訓蒙図彙大成	十冊			
	先進繡像玉石雜誌	五冊			
	絵本玉藻譚	二冊			
	絵稿及書き物	数葉	▲		
	天地人日記	一冊			本行は後の加筆。
(浮世絵) 国貞(三代豊国)	鎌倉武鑑勇士鑑	三枚続			
	安倍泰成調伏妖怪図	三枚続			
	堀川御所管弦之図	三枚続			
	日本武尊岩倉ニ武具ヲ藏スル図	三枚続			
	城州宇治川合戦対陣之図	三枚続			
	源義経牟礼高松之陣ニ軍配之図	三枚続			
	武田上杉川中島に対陣之図	五枚続			
	頼政怪鳥射菖蒲前褒美賜図	三枚続			
	越後大守長尾輝虎のもとへ村上義清援を特む図	三枚続			
	左馬頭義朝軍評定之図	三枚続			
	出雲国大社八百万神達縁結合図	三枚続			
	岩戸神楽乃起顯	三枚続			
	天文十五年武田晴信石之城攻図	三枚続			
	六波羅御所清盛公遊宴之図	三枚続			
	玄徳雪中訪孔明	三枚続			
	浅草寺額(従三位頼政)	二枚続			
	於鶴岡若宮静歌舞図	三枚続			
	大工上棟之図	三枚続			
	高館落城之図	三枚続			
	名古屋ノ関義家詠歌ノ図	三枚続			
	勧進大相撲八景稽古之図	三枚続			
	仮名手本忠臣蔵大序	三枚続			
	仮名手本忠臣蔵三段目	三枚続			
	仮名手本忠臣蔵四段目	三枚続			
	仮名手本忠臣蔵五段目	三枚続			
	仮名手本忠臣蔵十段目	三枚続			
	忠臣蔵夜討大手搦手貳国橋会合図	三枚続			
	舍那王僧正ヶ谷ニ学兵術図	三枚続			
	源九郎義経出陣図	二枚続			
	相撲 高ノ戸、錦	二枚続			
	相撲 岩見潟犬右エ門	一枚			
	相撲 生月鯨太左エ門	一枚			
	相撲 生月鯨太左エ門 手	一枚			
	相撲 生月江戸下り道中図	一枚			
	相撲 小柳常吉	一枚			
	相撲 荒馬吉五郎	一枚			
	相撲 不知火諾右エ門	一枚			
	相撲 秀ノ山雷五郎	一枚			
	相撲 劔山谷右エ門	一枚			

	相撲 柏戸宗五郎	一枚			
	相撲 関の戸平太夫	一枚			
	相撲 雲生嶺霧右エ門	一枚			
	題不詳	二枚続			
	六歌仙	三枚続			
	大仏供養図	一枚			
	本朝高名鑑	二枚続			
国芳	源三位頼政、菖蒲、猪早太	三枚続			
	奥州高館合戦	三枚続			
	武田上杉川中島対陣図	三枚続			
	曾我夜討之図	五枚続			
	義士焼香之図	三枚続			
	源平盛衰記駿河富士川合戦	三枚続			
	頼朝義経浮島原に对面の図	三枚続			
	源義経一ノ谷頂上陣揃之図	三枚続			
	熊坂長範と牛若丸	三枚続			
	鏡の宿牛若熊坂を斬る図	三枚続			「鏡」はミセケチの上、「赤坂」と加筆。
	摂州大物浦平家怨霊顯る図	三枚続			
	源平合戦熊谷平山一二懸之図	三枚続			
	宇治川大合戦	三枚続			
	義経之家人一騎当千廿一騎之図	三枚続			
	義経奥州下向秀衡对面之図	三枚続			
	腰越状	二枚続			
	安宅閤勦進帳之図	三枚続			
	義経十九臣	三枚続			
	頼朝公富士之御狩図	三枚続			
	義経一代記之内(吉野山中さすらい)	三枚続			
	始皇帝長生不老薬を求めて蓬萊に至る図	三枚続			
	遠藤武者	二・半			
	頼光鬼退治	三枚続			
	清盛布引滝悪源太雷になる図	三枚続			
	最明寺時頼常世の屋に宿る図	三枚続			
	宮本武蔵白倉を討つ図	三枚続			
	見立武士六歌仙	三枚続			
	鎮西八郎島渡之図	三枚続			
	平将門一子將軍太郎古寺に会す図	三枚続			
	平相国夕日を招く図	三枚続			
	太平記天竜川浮橋之図	三枚続			
	為朝氏船を射る図	三枚続			
	新田義貞稲村ヶ崎図	三枚続			
	壇浦戦之図	三枚続			
	長門国赤間浦源平大合戦之図	三枚続			
	復讐鑑烹雑之図	三枚続			
	忠孝義勇伯父復讐	三枚続			
	源頼朝卿富士牧狩之図	六枚続			
	工藤左衛門佐々木太郎と喧嘩之図	三枚続			
	隅田川筏渡之図	三枚続			
	大多春永の城中浦猿吉郎三日に修復之図	三枚続			
	美盾八競高殿落雁	三枚続			
	美盾八競帰帆	三枚続			
	仁田忠常富士の人穴に入る図	三枚続			
	長門国赤間浦平家一門亡びる図	三枚続			
	源平盛衰記讃州八島合戦	三枚続			
	安德帝入水	三枚続			
	八大伝の人物品革新合戦図	三枚続			

	七福人図	三枚続		
	浮世よしづくし	二枚続		
	源頼家小坪遊覧朝夷鰐を捕 ふ図	三枚続		
	道外見富利十二志	三枚続		
	源平盛衰記阿波国勝浦合戦	三枚続		
	木曾義仲俱利伽羅合戦之図	三枚続		
	川中島信玄謙信旗本大合戦 之図	三枚続		
	楠正行事議図	三枚続		
	頼朝旗上 山本判官討取之 図	三枚続		
	源頼朝隅田川旗上着到勢揃 之図	三枚続		
	木曾義仲出陣之図	三枚続		
	近衛院の御宇頼政怪鳥退治	三枚続		
	墨戦之図	三枚続		
	右大将頼朝相撲御覧図	三枚続		
	頼朝公御狩図	三枚続		
	延元元年湊川合戦	三枚続		
	兵庫表大合戦之図	三枚続		
	信州川中島大合戦之図	三枚続		
	新田義貞兵庫浦出張之図	三枚続		
	頼朝公鶴岡神前に於て静の 舞を見給図	三枚続		
	保野河津相撲之図	三枚続		
	駒くらべ盤上太平碁	三枚続		
	源家正統祖譜小伝	三枚続		
	武田上杉川中島大合戦之図	三枚続		
	文治四年頼朝公奥州征伐	三枚続		
	八幡太郎凱旋之図	三枚続		
	楠正行長柄川の舟橋を切て 足利軍を破る図	三枚続		
	建久四年曾我兄弟夜討之図	三枚続		
	大日本六十余州之図	十六枚	〈三代豊国トノ聯作〉	
	名高百勇伝	二十六 枚		
	賢女烈婦伝	二枚		
	本朝鯨道略伝	三枚		
	通俗水滸伝豪傑一百八人之 一個	二枚		
	本朝水滸伝剛勇八百人一個	六枚		
	本朝水滸伝豪傑八百人一個	五枚		
	武勇擬源氏	三枚	美濃紙半折	
	人で人の顔を拵へた図	四枚		
	大男(生月鯨太左エ門)	一枚		
	源頼光	一枚		
	坂田金太郎	一枚		
	宮本無三四	一枚		
	坂田怪童丸	一枚		
	讃岐の海人	一枚		
	仁木源之助	一枚		
	鎌田又八	一枚		
	西塔鬼若丸	一枚		
	和田平太	一枚		
	毛谷村六助	一枚		
	道外獣の雨やどり	一枚		
広重	源平盛衰記粟津原合戦	三枚続		
	餅酒二偏嘉世意の多多買	三枚続		
	信州川中島合戦	三枚続		
	曾我物語図会	十五枚		
	東都名所	七枚		
	江戸名所	三枚		
	木曾街道六十九次	七十枚	〈広重・英泉連作〉	
	東海道五十三次(小形)	五十五 枚	〈島田なし〉	員数ミセケチ の上、五十四 枚と加筆。
	東海道五十三次(小形)	五十六 枚		

国盛	東海道五十三次(極小形)の中	三十七枚			
芳虎	九州岸柳島、宮本、佐々木仕合図	三枚続			
	武田三代記(信州川中島合戦)	三枚続			
	奥州泰衡征伐軍議	三枚続			
	信州川中島大合戦(永禄四年)	三枚続			
	信州川中島大合戦	五枚続			
	寿永三年宇治川大合戦(川軍)	三枚続			
	寿永三年宇治川大合戦(陸戦)	三枚続			
	保元軍記白川殿合戦	三枚続			
	保元合戦軍議	三枚続			
	西海蟹女水底ニ入テ平家一族ヲ見	三枚続			
	寿永の春勢田の戦	三枚続			
	保元平治物語郁芳門合戦	三枚続			
	堀川夜討ノ図	三枚続			
	牛若丸、白河弾海仕合	三枚続			
	武勇名将鑑	五枚			
	本朝太平記	三枚			
	前太平記	二枚			
貞秀	田村將軍記	三枚続			
	宮本武蔵修業図	三枚続			
	忠義水滸伝豪傑一百八人	三枚続			
	小人島巡り	二枚続			員数ミセケチの上、三枚続と加筆。
	武田上杉両将	三枚続			
	源頼朝奥州征伐	三枚続			
	大仏供養	三枚続			
	稚児大名行列	三枚続			
	一ノ谷源平合戦	三枚続			
	富士の裾野巻狩之図	三枚続			
	鞍馬山僧正ヶ谷之図	三枚続			
	武田家勇將軍評定之図	三枚続			
	浅草寺境内大人形(破本)	一枚			本行はミセケチの上、「小人島巡りの一枚なりしたため抹消ス」と加筆。
芳藤	源頼朝富士巻狩之図	三枚続			
	木曾栗津合戦	三枚続			
	佐々木盛綱藤戸渡	三枚続			
	楠公摂州湊川発向之図	三枚続			
	牛若辨慶五條橋	二枚続			
国安	平良門右内裏ニ於軍評定之図	三枚続			
貞重	火消(破本)	二枚続			
	神田大明神御祭図	三枚続			
国輝(貞重改)	ギヤム細工船	二枚続			
重光	源平一ノ谷合戦	三枚続			
芳艶	どうげじごくごらく	三枚続			
	九州藤吉三人力	細物一枚			
	源平盛衰記嚴島	三枚続			
	難波六郎布引滝深淵ニ入りテ竜宮ニ至ル	三枚続			
	総州猿島大内裏之図	三枚続			
春舛	とうもろこし鶏に化す	一枚			
	とうもろこし花咲く	一枚			
	江戸根津大権現御祭礼番附	三枚続			
芳雪	源平盛衰記ノ内宇治川先陣	三枚続			
春亭	妻鹿孫三郎(破本)	一枚			
	井彈正(破本)	一枚			
	新板一ノ谷合戦	三枚続			

	堀川夜討	三枚続			
芳鶴	三浦畠山衣笠合戦	三枚続			
	朝比奈の肩に諸天王祭礼図	三枚続			
	川中島大合戦	三枚続			
筆者不明	勸進能興行場所略図	大判一枚			「不明」はミセケチの上、「英泉」と加筆。
三代豊国、広重、国芳合作	東海道五十三対	五十五枚			「合作」はミセケチの上、「聯作」と加筆。
(雙六) 国芳	本朝百勇伝英雄雙六	三枚続			
豊国	廿四孝雙六	四枚続			
筆者不詳	「上り」だんな双六	二・半			
芳虎	百物語戯双六	一枚			
貞秀	新板子供出世すご六	一枚			
広重	おさな遊び正月双六	一枚			
豊国	源平ふり分双六	一枚			
豊国	源氏雙六	四枚続			
国直	新板放気福助寿語六	一枚			
芳虎	男女振分諸礼儀形双六	一枚			
筆者不詳	子ども遊びまとい双六	一枚			
豊国	奥奉公出世双六	一枚			
筆者不詳	甲越振分双六	二枚続			
筆者不詳	新板稚遊成人双六	一枚			
国貞	賢烈貞婦本朝操寿古呂久	三枚継			「国貞」はミセケチの上、「英泉」と加筆。
芳虎	新板国盡名所双六	二枚続			
豊国	武芸立身館双六	二枚続			
英泉	英勇源平名将寿古六	二枚続			
貞秀	出世娘栄寿古録	二枚続			
貞房	春手始将基双六	二枚続			
肉筆	「上り」御大老双六	四枚継			
肉筆	源氏合双六	五枚継			
英泉	菊寿すご六	三枚継			
肉筆	狂言双六	九枚継			
雪庵肉筆	妖魅雙六	六枚継			
広重	五十三駅東海道富士見雙六	二枚続			
肉筆	日光道中ふりわけ双六	四枚継			
広重	曾我仇討双六	三枚継			
	一枚もの肉筆双六	二種			
	破片一枚				
双六包紙		数種			

註

(1) 本稿においては、墓域(墓苑)全体をさして「墓地」、各霊の埋葬されている区画を「墓所」、墓所の地上部分に建てられた石碑・石塔を「墓碑」と呼び、統一して用いる。

(2) 本史料所収「建中寺墓地改葬日誌」序に「工事は尾張大藩二代光友卿以下三十八の藩主奥方等の諸霊の発掘にあるため極秘に関係者のみを以て工事を無事完了することを主旨とし、従業員には諸霊に対し崇祖愛敬の念を以て鄭重懇切に仕事を運ぶ事に格段の注意を払へり。」とある。また本史料に綴じ込まれた「従業員心得」第一項にも、「本工事は祖先崇拜の根源をなすものなるを以て其取扱に細心の注意を払ひ(後略)」という一文がある。

(3) 尾張家の墓所にかかわる主な先行研究・調査報告書のうち、本史料の内容を引用するのは次のとおり。いずれも、昭和五十七年(一九八二)および平成十三年(二〇〇二)に再発見・発掘がなされた五基の墓所について述べるにあたり、改葬当初の記録として地下構造の記述が部分的に紹介されている。

木村有作「尾張藩御廟所遺跡(第二次)」『埋蔵文化財調査報告書 四三(名古屋市文化財調査報告 五六)』(名古屋市教育局、二〇〇二年)。

木村有作「尾張徳川家墓所の地下構造」『考古学に学ぶⅡ(同志社大学考古学シリーズⅧ)』同志社大学考古学シリーズ刊行会、二〇〇三年。

野澤則幸「建中寺における大名墓の上部構造について」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』八、名古屋市見晴台考古資料館、二〇〇六年。

野澤則幸「尾張藩主徳川家墓所」『考古学ジャーナル』五九五、ニューサイエンス社、二〇一〇年。

野澤則幸「尾張藩主徳川家墓所」(新修名古屋市史 資料編 考古Ⅱ名古屋市、二〇一三年)。

(4) 近世大名墓に関わる主な調査報告書・先行研究は次のとおり。
鈴木尚・矢島恭介・山辺和行編『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』(東京大学出版会、一九六七年)。
板詰秀一監修『近世大名墓所要覧(考古調査ハンドブック四)』(ニューサイエンス社、二〇一〇年)。

寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編『東叡山寛永寺徳川將軍家御裏方靈廟 三考察編』(吉川弘文館、二〇一二年)。

板詰秀一監修・今野春樹著『徳川家の墓制』(北隆館、二〇一三年)。
板詰秀一・松原典明編『近世大名墓の世界(季刊考古学・別冊二〇)』(雄山閣、二〇一三年)。

大名墓研究会編『近世大名墓の成立 信長・秀吉・家康の墓と各地の大名墓を探る』(雄山閣、二〇一四年)。
大名墓研究会編『近世大名墓の展開 考古学から大名墓を読み解く』(雄山閣、二〇二〇年)。

(5) 坂重吉「尾張家の石造墓標の使用石材に就て」『尾張家の墓標表面に彫刻の溝線に就て』「建中寺徳川家墓所の石燈籠に就て」(『尾張の遺跡と遺物 上巻』(愛知県郷土資料刊行会、一九八一年、初出は一九三九年)。

(6) 昭和五十七年、名古屋市立あずま中学校の体育館新設における基礎工事中に発見された三基については、名古屋市見晴台考古資料館編『東区筒井一丁目あずま中学校内所在 尾張藩御廟所遺跡発掘調査概要報告書』(名古屋市教育局、一九八四年)にまとめられている。また、平成十三年、市営住宅の基礎工事中に発見された二基については、前掲註(3)木村有作「尾張藩御廟所遺跡(第二次)」にまとめられている。

(7) 前掲註(3)木村報告書・論文。

(8) 前掲註(3)(5)のほか、愛知県史編さん委員会編『愛知県史 別編 文化財一 建造物・史跡』(愛知県、二〇〇六年)参照。

(9) 前掲註(3)野澤則幸「建中寺における大名墓の上部構造について」。

(10) 名古屋市における戦後復興の都市計画に関しては、主に名古屋市計画局・財団法人名古屋都市センター編著『名古屋都市計画史(大正八年〜昭和四十四年)』(財団法人名古屋都市センター、一九九九年)を参照した。

(11) 昭和二十七年以前の改葬については、主に「昭和拾三年四月 名古屋地方散在ノ寺院御墓御改葬書類」(個人蔵、新財団史一〇〇六六号)、「昭和十四年 隆興院様御始七拾八霊建中寺御墓所ヨリ定光寺納骨堂へ御移霊ニ関スル書類」(個人蔵、新財団史一〇〇七二号)を参照した。

(12) 「昭和二十七年八月 建中寺御墓所改葬及定光寺納骨堂奉安に至る記録」(個人蔵、新財団史一〇〇六九号)に各書簡の写しが綴じられている。

(13) 前掲註(12)参照。

(14) 前掲註(3)報告書・論文にてこの名称で紹介されるほか、徳川美術館が所蔵する本史料の複写(コピー)本外題にこの名称が採られている。

(15) 前掲註(12)参照。

(16) 筆者は、筆跡により当時の美術館職員・桜井清香の可能性が高いことを、徳川美術館参与・佐藤豊三氏および同館特任学芸顧問・四辻秀紀氏より御教示いただいた。「改葬日誌」によれば、桜井はこの時、墓碑拓本作成、墓地見取り図作成、墓誌調査を担当していた。

(17) 尾張藩士の朝日文左衛門重章の日記である『鸚鵡籠中記 卷之十』(『名古屋叢書続編 十』(名古屋市教育局教育委員会、一九六六年)所収)元禄十三年十月二十八日条には、二代光友の棺槨の各寸法や、「三つ物」と呼ばれる詰め物について詳しい記述がある。

(18) 前掲註(6)参照。

(19) 「昭和二十七年 建中寺墓所に関する書類」(個人蔵、新財団史一〇〇七一号)に貼り込まれた二代光友墓所発掘に関する当時の新聞(社名・日時は未詳)の写真にも、吊り上げられた巨大な木製の箱が写されている。

(20) 前掲註(6)参照。

(21) 前掲註(4)鈴木・矢島・山辺編書、板詰監修書、寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編書参照。出土例としては六代將軍家宣以降になるが、中川仁喜「仏教的観点からの遺物解釈」(寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編書所収)によると、

記録上では慈眼大師天海の例が最も早く、三代將軍家光も使用した記録がある。

(22) 前掲註(21)参照。九代將軍家重・十二代將軍家慶・十四代將軍家茂の墓所から出土している。

(23) 前掲註(4)寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編書参照。將軍正室・生母に三件の出土例がある。今野春樹「墨書柩葉について―念仏柩葉を中心に―」(寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編書所収)に詳しい。

(24) 細野要斎著「尾張名家誌 初編」(安政四年(一八五七)刊)には「並河健」として収録されており、字は徳脩、号は魯山、通称は自晦と記される。初代義直に御医師として仕えた并(並)河芳庵の子で、儒者・掘杏庵に学び、兄・意卜の後を継いで法眼になり、宝永七年(一七一〇)に八十二歳で歿したという。「稿本藩士名寄」・「士林派涸」(いずれも名古屋蓬左文庫蔵)の「并河自快」(後者では「自悔」と同一人物と思われる、これらの記録から網誠に仕えたことが判明する。なお、「源敬公御行状」(元禄八年(一六九五)、徳川林政史研究所蔵)・「靈仙院殿御祠堂記」(元禄十二年、名古屋蓬左文庫蔵)に、いずれも「並河子健」(後者では「并河」)の奥付があることを、徳川美術館学芸部部長代理・吉川美穂氏および同部学芸員・板谷寿美氏に御教示いただいた。網誠墓誌に加え、子健が初代義直・千代姫(二代光友正室)の来歴を編纂するという、墓誌撰文に類する職務を担ったことがわかる。

〔附記〕本稿執筆にあたり、関係各位にご理解とご協力を賜りました。また財団史料については香山里絵氏に御教示いただきました。記して御礼申し上げます。

(徳川美術館学芸員)

金 鯨 叢 書 第四十八輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

令和三年三月三十日 編集
令和三年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川義崇海

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950) 〇一一一番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話(3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話(935) 六二六二番(代)

印刷所

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話(533) 六八六〇番(代)